

2026年7月12日

説教題『恵みを学ぶ歩み』フィリピ 4 : 11b~13 第二コリント 4 : 9

信仰って、なに？シリーズ⑤

主任牧師 加藤 誠

「わたしを強めてくださる方によって、わたしにはすべてが可能です」(フィリピ4章13節)

「すると主は、『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ。』と言われました。』(第二コリント12章9節)

「わたしは、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。」(フィリピ 4・11~12)。これは使徒パウロが牢獄の中で書いた言葉です。不思議な力を持った言葉です。牢獄という「明日どうなるか分からない」不安の中に身を置きながら、それでも心にゆとりをもち、また凜とした姿勢で、顔をまっすぐ前に向けて、日々を生きているパウロの姿が見えてくるような言葉です。

「満足すること」とは「足ること」「足りていること」。パウロはここで「足ることを習い覚えた」というわけですが、実は日本にも似た言葉で「足るを知る」という言葉があります。これは「足るを知る者は富む」という中国の思想家老子が語った言葉が由来と言われています。今、自分が持っているもの、収入、仕事、住んでいる家、着ている服で十分だと満足する。人と自分を比べない。人が持っているものと自分が持っているものを比べない。欲望には際限がない。求め続けている限り、心が満足することはないが、欲張らずに現状に満足することができれば、心も満足し豊かに生きることができる…という意味のようです。

ただ、この「足るを知る」とパウロの言葉は、似ているようで本質的にまったく違うものがります。老子は「人としての心構え」「心のありよう」を説いているのに対して、パウロは「私たちを深く愛し考えてくださっている神」との関係で考え、受けていく。神との縦の関係＝「信仰」を語っている。13 節で「わたしを強めてくださる方のお陰で、わたしにはすべてが可能です」と語っている通りです。パウロは、自分の心構えで、自分の人生や世界の味方が変わると語っているのではない。「わたしを強めてくださる方」によってわたしは習い覚えた。主なる神、具体的には十字架と復活にご自身をあらわされた主に日々教わりながら、自分はどんな境遇においても豊かに生きるすべを学ぶことができたというのです。

そのようにしてパウロはいつも「神さまを主語にして」自分を語ります。パウロが「自分の置かれた境遇」というとき、「神さまがこの自分を導き、神さまがこの場所に自分を置いてくださっている境遇」であり、「自分は習い覚えた」という時には「神さまから学んだ。神さまから習い覚えた」ということなのです。つまり、パウロは独りではない。パウロの中に神さまが生きている。神さまと一緒に歩んでいる。人生の

どのような状況においても、どんな暗闇、どんな苦難の中にも、主イエスが一緒に歩んでくださっている。その主イエスの恵みと愛を知らされた故に、どのような境遇でも「心満たされて」歩むことができる秘訣を学んだ…と言っているのです。

パウロが自分に与えられた「肉のとげ」について語っている箇所があります。「肉のとげ」とはパウロの持病であるてんかんのことではないかと想像されたりしていますが、パウロは何度も「この肉のとげを抜いてください」と祈ったようです。「とげ」だから痛い、辛いわけです。「病気が良くなりもっと健康になれば、もっと神さまのために働けます！」ということでしょう。ところが、そのパウロへの答えは「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮される」（第二コリント 12：9）でした。あなたの病いの弱さの中にあり、弱さの中に十分に働く「神さまの恵み」を学んでいくように、パウロは示されたのです。

ただ覚えておきたいのは、私たちの側の「こうであつたらいいのに！」という願いが否定されているわけではありません。「神さまにお願いごとをしなさいいけない」ということではない。朴思郁牧師（西川口教会）によると、ボンヘッファーは「祈りは自分の願いを神に通知することではなく、自分の願いを神の御心の中に置くことだ」と捉えたそうです。つまり「祈りとは、こうであつたらいいのに。神さま、どうかお願いします！」という願いを神さまに知らせるだけでなく、その願いを神さまの御手の中に置くことだとボンヘッファーは捉えたのでした（朴思郁『一日一步』）。

詩編 37 編 4 節に「主に自らをゆだねよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる」（新共同訳）とあります。この「主に自らをゆだねよ」は、他の翻訳では「主にあって喜べ」「主にあって喜びを見出せ」「主にあって喜びを抱け」となっています。「主を喜ぶ」「主にある喜びを見つけていく」、そのとき私たちの心の願いがかなえられていく。ふつうとは逆の順序です。「わたしの願いがかなったから、喜ぶ」のではなく、「主を喜ぶとき、わたしの願いがかなう」。まず主を喜ぶ中で、わたしの願いがかなえられていく。これはどういうことでしょうか。マタイ 6：8 で主イエスはこう語られています。「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」。私たちは願っていい。でも、一番必要なことは神さまがご存じで、必要なことを実現してくださる。ですから朴先生は、詩編 37 編 4 節の「かなえられる心の願い」は、私たちのそのままの願いではなく、「主によって変えられた願い」かもしれないと言われます。私たちが心の願いを神の御手の中に置くとき、「かなえられない願い」にも意味が与えられていく。「わたしの願いがそのままにはかなわなかったけれど、神さまはわたしに一番必要な願いをかなえてくださいました！」と、言えるようにしてくださるということです。

信仰は、このようにして日々、神の恵みを学ぶ歩みです。それは確かな愛の約束に支えられている歩みです。「共にある！」という主の確かな約束に励まされて、主のもとにある喜びと恵みを学び取り、受け取っていきましょう。